



# 野外道具探訪記

村石太郎が訪ねるアウトドア・ギアの故郷

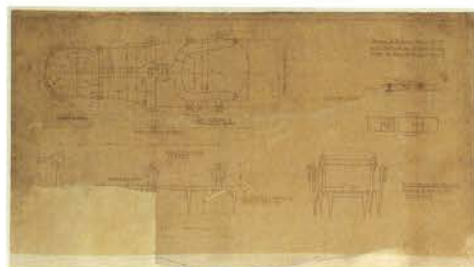
文・写真●村石太郎 Text by Taro Murashi イラスト●浅野文彦 Illustration by Fumihiko Asano



クールマイユールを  
防れ、村の鍛冶屋だ  
ったヘンリー・グリ  
ベルにクランボン製  
作を依頼した英国人  
オスカー・エッケン  
シュタイン(写真左)



上) 1929年、ヘンリー  
の息子ロラン・グリベル  
が作った2本の前爪を備  
える12本爪クランボン。  
これにより、より早く、  
より効率的な登山が可能  
になった。下) 19世紀の  
初めのものから現在まで  
の、グリベル家によって  
作られたアイスアックス



エッケンシュタインによって引かれたクランボンの図面。1909年、これをヘンリーが受け取りクランボンが誕生した



エッケンシュタインの  
依頼を受けて、ヘンリー  
が製作した世界初の  
クランボン。当時は、  
まだ前爪のない10本  
爪クランボンであった

## 第69回【北イタリア編 その6】

# グリベル

生まれた土地や地域によって異なる進化を遂げてきた野外道具。  
本連載では、その背景を探るべくアウトドアギアの故郷を訪ねてゆく。  
今回は、1818年にモンブラン南麓の街クールマイユールにて創業され、  
農耕具を製作する鍛冶屋から、アイスアックスやクランボンを作る  
登山用品メーカーへと発展した「グリベル」を紹介していこう。



長靴形状と形容される国土は  
南北に長く、火山が多いなど  
日本と共通する。北部にはア  
ルプス山脈が連なり、同国最  
高峰はフランス国境にあるモ  
ンブラン(約4,811m)。そ  
のほか、スイスとの国境を成  
すマッターホルンやモンテロ  
ーザなどの4000m級の名峰  
が並んでいる

## 近代登山が開花した モンブラン山麓へ

イタリアのなかでも、ドイツ語圏の人たちが住むボルツァーノから、西へ、西へと進路をとり、ミラノを通過してからもさらに西へと高速道路をひたすら走り続ける。すると、両側から山並みが迫り、深い谷となり、同国の北西部に位置するヴァッレ・ダオスタ州（アオスタ谷の意）へと入ってきたことが分かる。1860年代まで、この一帯にはサヴォイアという小さな王国が築かれており、一帯の人たちの多くはイタリア語に加えフランス語も話すという。

さらに西へと向かっていくと、欧州の最高峰モンブラン（4810m）への登山基地として有名なクールマイユールにたどりつく。この先はモンブラン直下をフランスまで貫通するトンネルがあり、道は国境を越えてシャモニーの街へと続いているのだ。

近代登山が開花した当地である、クールマイユールのターミナル広場にはクランポンをかたちどったオブジェが飾られ、アウトドアシヨップが街のあちらこちらに散見できる。周囲に広がっているはずの雄大な景色が雨雲に遮られて、なにも見えないのが残念だ。

その翌日、クールマイユールから50〜60kmほど東に戻った小さな集落シャンパーニユへ向かった。今回訪れるクライミング・ギアカンパニー「グリベル」の本社は、



上) 1982年、グリベル一家から事業を引き継いだジョアキーノ・ゴッピ（右）と、息子のオリビエロ・ゴッピ。グリベル家の時代と変わらず、現在も家族経営の登山用具専門メーカーとして営まれている。右上) モンブラン頂上に立つوران・グリベル



村の鍛冶屋の3代目として、世界初のクランポンを作ったヘンリー・グリベル

欧州最高峰モンブラン。その南麓の登山口として賑わうクールマイユール。かつてのグリベルは、この街にあった



クールマイユール市内にある山岳博物館には、ヘンリー・グリベルが作ったクランポンやアイスアックスなどの展示がある。一帯で栄えたアルピニズムについて学ぶことができる興味深い施設だ



ここにある。もともとの創業地はクールマイユールなのだが、10年ほど前にここに移ってきたのだ。エントランスの扉を開けて、受付の女性に社長のジョアキーノ・ゴッピに会いに来たことを告げる。すると、ジョアキーノの妻であるベッタが小さな受付窓から顔を出し、「ようこそ」と言った。マーケティングを担当する彼女は、部屋の向こう側からやってくると、「彼は2階にいるわ」と話し、僕を案内してくれた。

### 19世紀初頭に始まった グリベルの歴史

いまから、およそ200年前のこと。モンブラン南麓にある小さな村クールマイユールにひとり鍛冶職人がいた。彼の名はドミニク・グリベル。村の唯一の鍛冶屋として、村人たちが使うシャベルやツルハシなどの農耕具、家の鍵や馬蹄などの製作に精を出していた。ある日、そんな彼のもとに農業に使うための道具を改良して、登山中に岩肌や雪面を突くための杖を作つて欲しいという依頼が舞い込む。登山用アイスアックス（ピッケル）の誕生である。

彼が使っていた鉄鋼材は、鉄道会社が使っていた中古品のレールであり、これを短く切り、熱を加えて加工していった。簡単にひび割れてしまつたり、折れたり、歪みが生じてしまうようでは鉄道の運行に支障が生じてしまう。そのため、レール用の鉄鋼材は当時と

しては品質がとて高く、耐久性にも優れていたのだ。

このようなできごとは、アルプス周辺のさまざまな村々で同時多発的に起こり、その結果イタリア北部のブレマーナの鍛冶屋から発展したカンブ、国境を越えたフランス・シャモニーではシャルレやシモンなどの登山用品メーカーが産声を上げることになる。近代登山の幕開けとともに、クールマイユールやシャモニーは小さな田舎町から重要な登山基地へと発展。ミラノやジェノバなどの都会からやってきた富裕な人々が、欧州一の高峰モンブランの頂上を極めようと大挙する、一大観光地へと変貌しようとしていた。

「アイスアックスについては、それが発明したかは分からない。欧州中のいろいろな場所で、いろいろな人たちが作り、改良していったんだ。はじめはツルハシのようなものであつたり、1m50cmもある木製の杖のようなものだったんだ。ドイツ人たちは、これをアルペンストックと呼んでいたね。アルプス用の棒という意味だ。これにだれかが刃をつけるように依頼したことで、雪面にくい込ませるブレイドがつき、杖の先端にも鋭利なスパイクが付けられた。こうして、現在のような形状になっていったんだ。長さも、次第に短くなっていった。発明したのは、僕たちではない。でも、グリベルはもっとも古くから作り始めていることは確かだよ（笑）」

大らかな口調で、ときおり冗談を交えながらジョアキーノがグリエルの歴史と、その始まりについて話す。

### 3代目ヘンリーによる クランポンの誕生

時は流れ、創業から約1世紀近くが経過した1909年、クールマイユールの鍛冶屋を継いでいたのはドミニクの孫ヘンリー・グリエルであった。一家は、すでに農機具などを作るだけの鍛冶屋ではなく、登山用アイスアックスを作る名人として村を訪れる登山客のあいだで評判となっていた。村人の生活は相変わらず細々としたものであったが、登山客から依頼される登山用品によってヘンリーたちは貴重な現金収入を得ていた。

こうした登山客は、当時繁栄を極めていた英国からの旅行者も多かった。そうしたなかのひとり、オスカー・エッケンシュタインが登山界に革命を巻き起こすアイデアを持ってヘンリーのもとを訪れる。1902年にK2遠征隊を指揮した登山家であった彼は、それまでもシャフトの長さが80cm強、ブレード幅20cm弱という片手で扱うアイスアックス、登山靴のソールに打ち付ける鉄釘の精巧なパターンなどを考案していた。

「ヘンリーらは、このころになると夏のあいだに登山用具を作り、冬になるとそれまで同様に農耕具



デザイナーズルームでは、新しいカラビナのアイデアをCAD図面に起こしていた。クールマイユール一帯で活躍するガイドたちが同社製品のアイデアの源だ



エントランス脇にある受付兼事務所。ファックスやコピーなどが置かれ、さまざまな事務仕事が行われている



'80年代にゴッピ家に経営が移されたころに誕生した旧ロゴマーク。5年ほど前から、徐々に新しいロゴが使われ始めている

本社内には、製品の耐久性などをテストするための施設も備。写真のアイスアックスは、ピックを水に突き刺した状態で過剰な負荷を与えて破断させたもの



左) 重りを入れた振り子状の機械にクランポンを装着して、前爪の耐久強度を確認するテスト。右) こちらは、無理な力を一箇所に加えたときのテスト



同社エントランスには、モンブランやクールマイユール、アオスタ谷など、地元をイメージした色鮮やかな絵画が飾られている

## グリベルは約200年前、 クールマイユールの鍛冶屋として始まったんだ



Humiko  
Asano  
2016 Jan.

を作って生活するようになっていったんだ。エッケンシュタインは、英国で鉄道技師として働いていてね。仕事柄、図面を引くことに長けていた彼は、クランボン（アイゼン）の製作図をヘンリーのものと持ち込んだんだ。じつは、その図面がどこにあるのか長年分からなかったんだけど、30年ほど前に昔の工場跡にあった箱の中に仕舞われていたのを見つけたんだ。それが、この図面だよ」

そう言うて見せてくれたのは、一部が破れ、退色した製作図面だった。一部が抜けているのは、ずぼらなヘンリーが図面をほったらかしにしていたためネズミに齧られてしまったのだとジョアキノは大笑いした。

彼は、多くの人がエッケンシュタインのアイデアを笑いのものにしてきたとも話す。

「役に立たないアイデアだって思われていたんだ。当時は保守的な考えを持った登山者が多くてね、こうした新しいアイデアはいつも否定されていた。100年以上も前のことだから、仕方のないことかもしれないね。でも、ヘンリーの製作したクランボンを手にする、エッケンシュタインは有名なブレンバ氷河を登ってモンブランへと楽々と登っていったよ。大成功だったのさ。それに、彼がクランボンを使う技術も同時に考案していたことも驚きに値するね」

近年、エッケンシュタインが登



組み立てが終わり、工場内にずらりと並べられたグリベル・クランボン。最後に、目視での検品が終了すると、製品の箱に収められ世界中へと出荷されていく



上 引き具を着けたストラップが、ヒール・バックルに通される。左 雪の固着を防ぐアンチスノープレートの取り付け作業



この奥では、樹脂製部品を作るための射出成型機器が置かれ、クランボンのバックルや保護カバー、アイスアックスのグリップなどが次々と製造されていた



永遠の定番であり、グリベルを代表する名作「G12ニューマチック」。写真のセミワンタッチ式のほか、ワンタッチ式やストラップ式もある

## エッケンシュタインのアイデアは最初、笑いものにされていた

「このときも、じつに多くの議論が交わされたんだ」と、ジョアキノは話す。

「とくにフランスの登山家たちは完全否定してね、それまでの10本爪クランボンにこだわった。これによって、『ピオーレ・ラマセ』というフランス流のテクニクが生まれたんだ。ようやく、こうした議論が終わったのは、

38年のことだ。ハインリッヒ・ハラーを始めとしたドイツとオーストリア

混成隊がアイガー北壁の初登頂を果たしたときだったね。このときに使われたのは、その2年前にロランの弟アマト・グリベルが作っていた『スーパードリジェロ』だったね」

このクランボンの素材には、ニッケル・クロムモリブデン（ニッケル・クロモリ）鋼が使われており、重さは両足で360gと驚くほど軽量だった。適度な硬さと粘り強さがあり、折れにくいという特徴を備えたニッケル・クロモリは、クランボンに最適な素材として、現在もつと普及している。

## 飛躍的な技術向上とグリベルの転落

グリベルの躍進はその後も続いた。29年、ヘンリーの息子ロラン・グリベルによって世界初の12本爪クランボンが発明されるのだ。自らも登山に親しんだ彼は、2本の前爪を考案し、爪先を雪面に蹴り込みながら登るフロントポイント技術を誕生させた。これにより、より早く、より効率のよい登山が可能になったのだ。

第2次世界大戦後、欧州の名峰のすべてで登頂が果たされると、登山家たちが次に目指したのがヒマラヤの高峰だった。53年のエベレスト、54年のK2、さらに55年のカンチェンジュンガ。覇権国の威信をかけて競われた、世界でもっとも高いこの三山は、グリベルが技術の粋を集めて開発した「スーパードリジェロ」とともに次々

と登頂されていった。

しかしジョアキーノは、名声は長続きしなかったと思いきす。

「成功のあとには、転落が待ち受けているものだ。あまりの成功に、あぐらをかいてしまったんだね。彼らはなにも変化を望まず、製品の品質を高める努力もしないまま

長期間に渡って経営を続けたんだ。そのため、80年ごろになると、グリエルの名は地に落ちかけていた。グリエル家は会社を閉鎖するか、引き継いでくれる人物を探すかを迫られた。そして、後継者として同社の再生を任されたのが、いま僕の前で話をしているジョアキーノ・ゴッピだったというわけだ。

彼の父トニー・ゴッピはクルーマイユールの名ガイドとして知られており、58年のイタリア隊によるガッシュアルプムIV峰初登頂時のメンバーのひとりであった。地元の登山ガイドとしてグリエルとも親交が深く、トニーの妻はグリエル家の親戚にあたる関係にもあったという。

「82年、僕が会社を引き継いだとき、グリエルという名前以外のすべてに手を入れ直した。当時あったすべての製品に改良を加え、世界各国への輸出ビジネスも始めた。日本でグリエルを扱っているマジックマウンテンの国井治さんとはそのころからの付き合いで、35年ほどいっしょに仕事をしている。世界中で、もつとも古いパートナー



上) ブレードの取り付けを待つアイスアックスのシャフト。左上) 自動的に樹脂部品を装着。左下) ブレードなどは国内にある別の自社工場で作られ、ここに集められる



製造されたカラビナは、最後に製品の一点一点が破断強度の半分のみで検査が行なわれる。そして、同じ機械の中でシリアルナンバーが刻印されたのち、出荷されていく



完成したデジチェーンを検査中。登山者の命を守る製品だけに、同社ではいたるところでこうした検品作業が行なわれている



「なんだ(笑)」

### 革新性と高い品質

「この建物の中で使うすべての電力は、ソーラーパネルで賄っているんだ。もちろん、雨が降り続いたときに備えて、普通の電気も引いてはいるけれどね(笑)」

同社自慢の太陽光エネルギーシステムが並ぶ建物の屋根の上で、ジョアキーノが思いを語る。

「イタリアの北東部にもうひとつ工場があるんだけど、この工場とあわせて約50人が働いているんだ。グリエル家がそうであったように、僕たちも家族経営の小さな会社だ。でも、規模が小さいからこそ、素早くさまざまなことに対応できるとも考えているよ。製品に改良を加えることも比較的容易だから、なにかいいアイデアを思いついたときにはすぐに試作品をつくって製品に反映させることができる。山に囲まれた場所にいることで、製品テストもすぐに行ける」

アウトドアウ

エアや登山靴などを手がけながらビジネスを広げるのではなく、これからもグリエルはクライミングツールに注力すると彼は断言する。



#### profile

### 村石太郎

むらいし たらう

北アラスカの原野を彷徨い続けるフリーランスライター。来月号からは、「南ドイツ編」へと突入します。その第一回目は、雪崩埋没者を見出すためのアバランチビーコンの利便性を飛躍的に高めたスノーギアカンパニー「オルトボックス」を訪れます!

「僕たちには広告宣伝などマーケティングに費やす予算はそれほどないからね。よりよい製品を作り、新しいアイデアを取り入れた製品を生み出すことで興味を持ってもらうしかないんだ。革新性と高い品質こそ、大切にしなければならぬことなんだ。より品質を高めることができれば、製品を購入してくれたユーザーを幸せにすることができたらう? これは悪い冗談だけど、僕たちが作っているのはニッチな製品で、購入者は限られた登山者だ。だからこそ、彼らの命を守らなとね。それほど多くはない製品を買ってくれる人を死なせては困るからね(笑)」

登山用品を作り続けながら、200年に迫る歴史をもつ登山用品メーカーがどれほどあるだろう。ゴッピ家に経営が引き継がれた現在も、2代目のオリビエロが父ジョアキーノを支える。さらに現在6歳というオリビエロの息子も、祖父や父の仕事を継ぎたいと話しているというから心強い限りだ。